

脳 MRI 研究によって 精神疾患の何がわかったのか

◆ 講師：小池 進介 先生

Lecturer: KOIKE Shinsuke

東京大学大学院総合文化研究科
進化認知科学研究センター / 准教授

(Associate Professor, Center for Evolutionary Cognitive
Sciences (ECS) at the University of Tokyo)



◆ 日時：令和 5 年 5 月 10 日（水）17:30～

Date May 10 (WED.) from 5:30 p.m.

◆ 場所：医学教育図書棟 3 階 第 2 講義室

Lecture room 2, Medical Education & Library Building 3F.

Abstract

磁気共鳴画像(MRI)が精神疾患の臨床研究に応用されて 30 年余りが立ち、精神疾患の脳病態が可視化されてきたが、こうした成果から診断バイオマーカーや創薬に結びついた臨床応用はない。この原因として、機種やプロトコルの違いによる差（機種間差）、疾患特異性・共通性の問題、発達や加齢変化を十分に除外できていない等が挙げられる。特に多施設 MRI 研究において機種間差の問題は大きい。これらの限界点を超越すべく、日本医療研究開発機構 (AMED) 国際脳プログラムをはじめとして、分野横断の多施設 MRI 共同研究体制が構築されている。この脳 MRI 研究の進展によって、検証的研究、疾患横断理解、基礎研究との融合、機械学習等による臨床応用の実現にシフトしつつあり、今後 10 年で精神疾患補助診断などの臨床応用技術が一般臨床に複数導入されると考えてよい状況になっている。精神科臨床だけでなく、医学全体でこの変化に対応する準備と協同が必要である。

◆ 担当：岩本 和也 教授（分子脳科学） / Prof. IWAMOTO Kazuya (Dep. Molecular Brain Science)

◆ レポート宛先/Essay (岩本 教授 宛 To Prof. IWAMOTO) : iwamotok@kumamoto-u.ac.jp

◆ レポート宛先/Essay (CC; 医学教務/Student Affairs Sec.) : iyg-igaku-3@jimu.kumamoto-u.ac.jp